

Title	揺れ動くエスニック・アイデンティティ：「回族」と「回民」の間で
Author(s)	今中, 崇文
Citation	2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集 = 2014年度 南京大学京都大学社会学人類学研究生论坛报告书 = The Proceeding of Kyoto University-Nanjing University Sociology and Anthropology Workshop, 2014 (2015): 79-83
Issue Date	2015-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/198422">http://hdl.handle.net/2433/198422</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

揺れ動くエスニック・アイデンティティ  
—「回族」と「回民」の間で  
今中 崇文 (IMANAKA Takafumi) \*

要旨：本報告では、陝西省西安市に暮らす回族を事例として、急激に現代化の進む中国の都市において、少数民族のエスニック・アイデンティティがどのように変容しているのかについて考察した。西安には中国でも有数の規模を誇る回族の集住地域が存在しており、ムスリムとしてふさわしい生活をおくることのできる空間であると認識されている。その一方で、集住地域を離れる回族も存在しており、人生を経済性を追求する時期と信仰を追求する時期とに分けるという考え方も見られる。さらには少数民族としての「回族」とムスリムとしての「回族」とを区別するような言説も見られるなど、アイデンティティの二極化が進行していることを示す。

## 1. 本報告の目的とその背景

本報告は、陝西省西安市に暮らす回族を事例として、急激に現代化の進む中国の都市において、少数民族のエスニック・アイデンティティがどのように変容しているのかについて考察するものである。

回族は、中国に暮らすイスラームを信仰する少数民族であるが、中華人民共和国が成立する以前には「回民」や「漢回」、「回回」などと呼ばれていた。中華民国期の1920年代から30年代にかけて、彼らを民族とみなすかについてさまざまな議論が繰り広げられたが、中国共産党は早くから「民族」として認定していた〔中田 1971；安藤 1996；松本 1999〕。

中国にはイスラームを信仰する少数民族は10あるが、回族はもっとも人口が多く、全国に散在している。他のイスラームを信仰する少数民族は、新疆ウイグル自治区や青海省、甘粛省といった西北地区に集中しているが、回族は、北は東北三省から南は海南省まで、西は新疆ウイグル自治区から東は山東省まで、全国ほぼすべての省に分散して居住している。

その一方で回族は、「大分散、小集中」とも表現されるように、各地域においては集住して生活することと知られている。これらの集住地域は、「哲瑪提（ジャマア）」や「教坊」、「寺坊」などと呼ばれ、回族に独特なコミュニティとして多くの研究者の対象となってきた。集住地域の中心には、「清真寺」と呼ばれるモスクや聖者廟が存在し、周囲には飲食店や食肉店、宗教用品店などが軒を連ね、ムスリムにとって生活しやすい空間となっている。

近年、中国各地の都市では経済発展にともなう再開発が急ピッチで進められているが、それらの再開発は都市の回族コミュニティにも大きな影響を及ぼしている。再開発の進む都市の清真寺において礼拝への参加者が減少していることは、すでに1990年代から指摘されており、その理由として漢族との混住による信仰心の低下や〔馬宗保ほか 1997〕、インフラの整備が進んだことにより清真寺の役割が低下したこと〔高橋 1998〕などが挙げられていた。

その中で回族出身の社会学者である白友涛は、南京市の再開発に飲み込まれた七家湾の回族コミュニティについて調査し、清真寺と住民の移転によりコミュニティが消失していく過程を伝えている〔白 2005〕。また、まさに再開発のただなかにあった北京の牛街について調査した良警宇は、再開発の結果、牛街の回族コミュニティが「伝統的で閉鎖的なコミュニティ」から「象徴的で開放的な民族コミュニティ」へと再構築されたと評価しながらも、近隣住民同士の交流が希薄化したことなどを記している〔良

---

\* 国立民族学博物館 外来研究員。

2006]。

一方で広州や深圳の回族コミュニティを調査した回族出身の人類学者である馬強は、回族コミュニティの解体は都市の現代化にともなう趨勢であり、伝統的なコミュニティが解体しても、ネット・コミュニティといった「流動的な精神コミュニティ」が誕生し、新たな適応を見せていると主張する〔馬強 2006；同 2007〕。とくに馬強は回族文化の継承について、「流動的な精神コミュニティ」の誕生により、「地域コミュニティの消失、もしくは弱体化の後、清真寺は象徴として特定の場合に効果を発揮するだけになるが、文化の継承が途絶えることはない」と述べている〔同 2007：99〕。

これに対し、南京市の回族コミュニティについて調査した西澤治彦は、回族が分散して居住している広州とは条件が異なることから、南京のように歴史ある集住地域はネット・コミュニティに移行するには抵抗があるのではないかと指摘する〔西澤 2012：126〕。そして回族のアイデンティティについて、沿海部の回族に限るとしながらも、その比重はムスリムとしてのそれではなく、「少数民族」の方に徐々にシフトしていっているように思われる」と記している〔西澤 2012：127〕。

同じく再開発の中にある都市の回族コミュニティを対象としながら、回族のムスリムとしての文化の継承は途絶えることがないとする馬強と、脱イスラーム化していくとする西澤の考えは大きく異なる。それは果たして、西澤の指摘するように、それぞれが見ている地域の条件が異なるためであろうか。

本報告では、南京市と同じく、長い歴史を持つ集住地域である西安の回坊を事例として、そこに暮らす回族のアイデンティティがどのように変容しているかについて考察してみたい。

## 2. 西安の回族集住地域：「回坊」

中国でも有数の古都である西安には、20 の清真寺が存在しており、約6万人の回族が暮らしている。市内には明代に建造された約4km 四方の城壁が現存しており、城壁に囲まれた旧市街地には鐘楼や鼓楼といった歴史的建造物が建ち並んでいる。西安の市街地が城壁の外に拡大したのは以降のことで、その後も順調に拡大を続け、現在では800万人の人口を抱える西北地方最大の都市へと成長している。

西安市内には、城壁の内外を問わず、複数の回族集住地域が点在しており、本稿で取り扱う「回坊」もまたそのひとつである。回坊は旧市街地のほぼ中心にある鼓楼の西北一帯に位置しており、「坊上」・「回民街」・「回民坊」などとも呼ばれ、回族の独特な軽食を扱う店や骨董品店の立ち並ぶ観光地として知られている。鼓楼から北に延びる北院門街とそれに繋がる西羊市にかけては飲食店が建ち並ぶ「飲食街」として、鼓楼から市内でも最大の規模を誇る化覺巷清真大寺の門前に連なる化覺巷は骨董品店が建ち並ぶ「古玩街（骨董品街）」として、連日観光客で賑わっている。

回坊は西安市内でも最大の回族集住地域であるが、他の集住地域とは異なり、複数の回族コミュニティによって構成されているところに特徴がある。回坊の範囲は一般に西大街以北、北院門以西、紅埠街以南、早慈巷以東の約1.5km 四方の地域と言われるが、その範囲内には12の清真寺が建ち並び、3万人の回族が暮らしている。彼らはそれぞれに所属する清真寺が分かれており、それぞれの清真寺を中心にコミュニティを形成しているとされる。

これだけの規模の集住地域ではあるものの、この地域は公的に回族の集住地域としては認められたものでない。回坊をフィールドとして1990年代にフィールドワークを実施したアメリカの文化人類学者ジレットは、回坊は公的に認められた空間ではなく、行政区画としては蓮湖区の一部に過ぎないものの、西安市民の間では（役人も含めて）よく知られた存在であると指摘している〔Gillette 2000：29〕。

西安の回坊の特徴のひとつに、これまで何度か大規模な都市再開発の対象となりながら、最終的には

再開発が実施されず、伝統的な集住形態を維持してきたことが挙げられる。近年では、西安市政府による観光開発の中で景観保護地域と認定されるとともに、回坊に暮らす回族によって周辺地域との境界を明確化するような動きにより、清末以来機能していなかった回坊という空間の再構築がなされている〔Imanaka 2010〕。

回坊に暮らす回族は、周辺地域との境界を強く意識し、回坊の外に出るとムスリムとしての生活を営むことが難しいと認識しているようである。筆者の友人である回族男性は、回坊内にある実家が狭くなったため、回坊外のマンションの1室を購入して暮らしているが、清真寺から自宅への帰路、回坊の範囲外へ出る直前に、それまでかぶっていた白帽を取ってポケットの中へしまうのを常としている。また筆者に調査中にかぶるようにと白帽をくれた際にも「余計なトラブルを招くとよくないから、回坊の外ではかぶらないように」という注意が添えられた。

### 3. 二極化する回族

再構築の結果、ムスリムとしてふさわしい生活を送ることのできる信仰空間として認識されるようになった回坊ではあるが、様々な事情からそこを離れてしまう回族も存在している。ジレットは、1990年代半ばから末にかけての調査を通じ、回坊の直面している問題として、住宅や都市インフラの未整備とともに、回坊内にある学校の教育水準の低さから、子弟を教育水準の高い学校に入学させるために、回坊外へ転居する回族が増えていることを挙げている〔Gillette 2000 : 27-28〕。また、就職などの理由により、回坊を離れるようなことになっても、人生儀礼を行うために旧宅を残している人が多いとも指摘している〔同 2000 : 30-31〕。

筆者のインタビューによると、回坊外の企業に配属されたことにより、一日のほとんどを回坊外で過ごし、清真寺での礼拝などに参加しなく／できなくなった人というのは、1950年代から存在している。近年では、とくに若者の礼拝参加者が減少しており、父親は熱心に毎日清真寺に通いながらも、その息子はまったく姿を現さないという事例は多く見られる。

そのようななかにも、回坊外の職場に勤めながら、時間に余裕ができると、必ず清真寺を訪れ、礼拝に参加する人々もいる。彼らはしばしば、十分な退職金がもらえるならば、一刻も早く退職して信仰に邁進したいと口にする。また、現在は生活に必要なお金を稼ぐ時期であり、少しぐらい礼拝などに支障が出るのも仕方がないことで、その分は退職してから取り返すという人もいる。

このように、自分の人生を分割し、若いうちは経済を追求し、引退してからは信仰を追求するというのは、今後、現代化する都市に生きる回族の標準的な人生設計となるのかもしれない。

回坊に暮らす回族の多くは、自らを「回民」と呼び、「回族」と呼ぶことはあまりない。そして周囲に暮らす漢族を「漢民」と呼んでいる。そこにはしばしば、ムスリムである「回民」と非ムスリムである「漢民」という対比の意味が込められている。最近では、ここに「回族」が加わりだした。意味を尋ねると、回族ではあるものの、ムスリムとは言えないような人々を指しているという。このように、回坊の回族においては信仰を軸として、「回民」と「回族」という二極化が進んでいると考えられる。

### 4. まとめとして

西安の回坊は中国でも有数の規模を誇る回族の集住地域であるが、近年、西安市政府による景観保護地域への認定と地元回族による周辺地域との境界の明確化により再構築がなされてきた。そして回坊に暮らす回族は、回坊こそがムスリムとしてふさわしい生活を送ることのできる空間であり、回坊以外の地域ではそのような生活を営むことは難しいと認識している。

その一方で、子弟の教育や職業的な問題から、回坊を離れる回族も存在している。清真寺での礼拝参加者も減少傾向にあるが、人生を経済性を追求する時期と信仰を追求する時期の2つに分け、退職してから信仰を追求するという考え方も見られるようになっている。さらには、少数民族としての「回族」とムスリムとしての「回民」とを区別するような言説も見られ、回坊に暮らす回族の中でもアイデンティティの二極化が進行していると考えられる。

このような二極化の進行には、先述の回坊という空間の再構築が大きな影響を及ぼしている。回坊はこれまで幾度も危機を乗り越え、ムスリムとしてふさわしい生活を送ることのできる空間として西安市内でも確固たる位置を占めるようになったからこそ、一時的には経済性を追求して少数民族としての「回族」となっても、いずれはムスリムとしての「回民」に戻ることができるという考え方を支えていると思われる。このように少数民族とムスリムの間で常に揺れ動く西安回族のアイデンティティについては、今後も引き続き調査・分析を行っていく必要がある。

また本報告では主に、回坊内の清真寺に集まる回族の人々の言説を中心に考察を行った。そのため、清真寺に通うことのなくなった人々や回坊を出てしまった人々、回坊外の回族集住地域の人々のアイデンティティがどのようなになっているかについては分析することができていない。これらの人々のアイデンティティとその変容については、今後の研究課題としたい。

※ 本報告論文は、今中崇文（著）、馬茜・鄒双双（訳） 2014 「城市少数民族聚居区的重構——以陝西省西安市“回坊”為例」『中国社会学的家族・民族・国家的話語及其動態』（Senri Ethnological Studies）韓敏・末成道男（編）、pp.227-242、吹田：国立民族学博物館をもとに再編集し、加筆・修正したものである。

#### 【参考文献】

〔日本語〕

安藤 潤一郎

1996 『『回族』アイデンティティと中国国家—1932年における『教案』の事例から—』『史学雑誌』105（12）：67-96。

高橋 健太郎

1998 「回族の居住分布と清真寺の機能 —中国・寧夏回族自治区、都市と農村を比較して—」『駒澤大学大学院地理学研究』26：27-43。

中田 吉信

1971 『回回民族の問題』（アジアを見る眼 40）東京：アジア経済研究所。

西澤 治彦

2012 「都市の再開発と回族コミュニティの変容 —江蘇省南京市の事例を中心に—」『近現代中国における民族認識の人類学』（東アジア研究専書）、瀬川昌久（編）、pp.105-133、京都：昭和堂。

松本 ますみ

1999 『中国民族政策の研究——清末から1945年までの「民族論」を中心に』東京：多賀出版。

〔中国語〕

白 友涛

2005 『盤根草—城市現代化背景下的回族社区』銀川：寧夏人民出版社。

良 警宇

2006 『牛街：一個城市回族社区的變遷』北京：中央民族大学出版社。

馬 強

2006 『流動的精神社区——人類学視野下的広州穆斯林哲瑪提研究』北京：中国社会科学出版社。

2007 「都市穆斯林社区的文化適応及認同」『地域社会与信仰習俗——立足田野の人類学研究』王建新・劉昭瑞（編）、pp.90-100、広州：中山大学出版社。

馬 宗保、金 英花

1997 「銀川市回漢民族居住格局變遷及其对民族間社会交往的影響」『回族研究』26：19-30。

[英語]

Gillette, Maris Boyd

2000 Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption Among Urban Chinese Muslims. California: Stanford University Press.

IMANAKA, Takafumi

2010 Tourism and Urban Renewal: The Case of Xi'an's "Hui Quarter": Senri Ethnological Studies 76: 193-204.